

博士論文（要約）

論文題目 一七世紀前半における朝鮮の対明清貿易政策

氏名 辻 大和

〈目次〉

目次	3
図表一覧	6
凡例	8
序論	9
第一章 一七世紀初頭朝鮮の対明貿易―初期中江開市の存廃を中心に	25
はじめに	
一 壬辰・丁酉の乱後、朝鮮の対明貿易の展開	
二 中江開市の継続要因	
三 中江開市の問題点	
四 燕行使貿易をめぐる明・朝鮮間の摩擦	
おわりに	
第二章 朝鮮の対日通交再開と朝明関係	51
はじめに	
一 日朝通交の再開過程と貿易	
二 明からみた日朝貿易	
三 明の干渉の背景―琉球侵攻の影響	

おわりに

第三章 一七世紀初頭の朝明貿易と人蔘政策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72

はじめに

一 一六世紀末以降の中国向け人蔘輸出拡大と朝鮮における人蔘流通

二 人蔘調達難の要因と朝鮮政府の取締策

三 人蔘取引取締策の通時的意義

おわりに

第四章 一七世紀朝鮮・明間における海路使行と貿易の展開・・・・・・・・・・・・ 104

はじめに

一 海路使行の実施状況

二 海路使行にともなう貿易の拡大

三 海路使行の諸問題

四 朝鮮・明政府による密貿易対策

おわりに

第五章 朝鮮の対後金貿易政策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 136

はじめに

一 朝鮮・後金間における貿易の形態

二	朝鮮政府の対後金貿易政策	
三	朝鮮の対後金貿易政策の背景	
	おわりに	

第六章	丙子の乱後朝鮮の対清貿易について	164
-----	------------------	-----

はじめに

一	朝貢と開市	
二	朝貢と開市によらない貿易	
三	朝鮮と清間における官員の往来	
四	密輸とその対策	
	おわりに	

結論		200
----	--	-----

初出一覧		209
参考文献一覧		210

図表一覧

第二章

表 1 一五九〇年代末～一六一〇年代における明官の釜山訪問歴 59

第三章

表 1 一七世紀初頭に朝鮮使節が明皇室に献上した人蔘の数量 75

表 2 万曆癸丑（一六一三年）版『攷事撮要』にみる人蔘産地の分布 79

表 3 一七、一八世紀の諸法令における人蔘商人取締規定の比較 90

第四章

表 1 海路による対明使行一覧 105

表 2 本章で用いる使行録一覧 108

表 3 対明使行時の船隻数 112

表 4 仁祖元（一六一三）年使行時の船別、人員配置 113

図 1 朝鮮の対明使行路の変遷 110

第五章

第六章

表 1 歳幣の品目一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
表 2 天聡九年（一六三五年）中における越境採蔘事件一覧・・・・・・・・・・・・
150 138

表 1 定期的な進貢方物の一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
表 2 崇徳二（一六三七）年当初の歳幣額・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
表 3 平安道 軍官の往来状況（仁祖 一五（一六三七）年）・・・・・・・・・・・・
181 172 167

本文

博士論文の全部が、すでに出版されていて全文公表が不可能である。

刊行された著作は、辻大和『朝鮮王朝の対中貿易政策と明清交替』汲古書院、二〇一八年、ISBN 9784762960505である。

参考文献一覧

史料 (『本文および脚注で表記した史料名』…本稿で典拠した史料の書誌の順に記した。)

朝鮮史料

- 『宣祖實錄』…『李朝實錄 二七〇冊 宣祖實錄』(学習院東洋文化研究所、一九六一年)。
『光海君日記』(太白山本)…『朝鮮王朝實錄 二六〇～三二二』(国史編纂委員会、一九六九年)。
『光海君日記』(鼎足山本)…『李朝實錄 三二一～三三三冊 鼎足山本光海君日記』(学習院東洋文化研究所、一九六二年)。
『仁祖實錄』…『李朝實錄 三四〇～三五五冊 仁祖實錄』(学習院東洋文化研究所、一九六二年)。
『備邊司謄錄』…『備邊司謄錄』全二八冊(国史編纂委員会、一九五九～一九六〇年)。
『承政院日記』…『承政院日記』一～五(国史編纂委員会、一九六一年)。
『瀋陽日記』…『影印 昭顯瀋陽日記・昭顯乙酉東宮日記』(民俗苑、二〇〇八年)。
『經國大典』…『学東叢書六 經國大典』(学習院東洋文化研究所、一九七一年)。
『大典續錄』…『学東叢書八・九 大典續錄・大典後續錄』(学習院東洋文化研究所、一九七二年)。
『大典後續錄』…『学東叢書八・九 大典續錄・大典後續錄』(学習院東洋文化研究所、一九七二年)。
『續大典』…『学東叢書一二 續大典』(学習院東洋文化研究所、一九七二年)。
『大明律(直解)』…『大明律』国立公文書館内閣文庫所蔵本(請求番号 二九五―一〇一)。
『受教輯録』…ソウル大学校奎章閣編『奎章閣資料叢書 各司受教 受教輯録 新補受教輯録』(ソウル大学校奎章閣、一九九七年)。

『新增東國輿地勝覽』：『新增東國輿地勝覽』（明文堂、一九五九年）。

『通文館志』：『通文館志』（民昌文化社、一九九七年）。

『萬機要覽』：四方博校訂『萬機要覽』（朝鮮總督府中樞院、京城、一九三七年（財用編）、一九三八年（軍政編））。

『東萊府接倭事目抄』：『東萊府接倭狀啓謄錄可考事目錄抄冊』ソウル大 학교奎章閣所藏本（請求記号 奎貴九七六四）。

『事大文軌』：『朝鮮史料叢刊七 事大文軌』（朝鮮總督府、一九三五年）。

『邊例集要』：『韓國史料叢書一六 邊例集要』上下（國史編纂委員會、一九七一年）。

『攷事撮要』 万曆癸丑版：『奎章閣叢書第七、攷事撮要』（京城帝國大學法文學部、一九四一年）。

『攷事撮要』 肅宗年間版：『攷事撮要』韓國國立中央圖書館所藏本（請求記号 한古朝九一・四〇）。

『攷事撮要』 万曆乙酉版：『攷事撮要』（前田育徳會尊經閣文庫所藏）。

『大東輿地圖』：京城帝國大學法文學部編『奎章閣叢書 第二 大東輿地圖』（京城帝國大學法文學部、一九三六年）。

「關西清北全圖」：「關西清北全圖」嶺南大學校博物館編『영남대박물관
地圖』（嶺南大學校博物館、一九九八年）

소장

韓國의

옛

『西厓先生文集』：『韓國文集叢刊』五二（民族文化推進會、一九九〇年）。

『海月集』：『韓國文集叢刊』統一〇（民族文化推進會、二〇〇五年）。

『敬亭續集』：『韓國文集叢刊』七六（民族文化推進會、一九九一年）。

『清陰集』：『韓國文集叢刊』七七（民族文化推進會、一九九一年）。

『懶齋集』：『韓國文集叢刊』統二四（民族文化推進會、二〇〇六年）。

- 『無住逸稿』：『韓国文集叢刊』続二二（民族文化推進会、二〇〇六年）。
- 『沙西集』：『韓国文集叢刊』六七（民族文化推進会、一九九一年）。
- 『梨川相公使行日記』：『梨川相公使行日記』韓国国立中央図書館所蔵本（請求記号 韓古朝六三―三）。
- 趙澱『燕行録』：『豊壤趙氏文集叢書』第二輯（豊壤趙氏花樹会、一九八七年）。
- 『雪海遺稿』：『韓国文集叢刊』続三〇（民族文化推進会、二〇〇六年）。
- 『潜谷遺稿』：『韓国文集叢刊』八六（民族文化推進会、一九九二年）。
- 『亂中雜録』：『大東野乘』七（朝鮮古書刊行会、一九一〇年）。

明清史料

- 『大明會典』：『大明會典』東京大学総合図書館所蔵本（請求記号 L11―1800）。
- 『明神宗實録』：『明神宗實録』全二八冊（中央研究院歴史語言研究所、台北、一九六六年）。
- 『本草品彙精要』（商務印書館、上海、一九五五年）。
- 『明史』：『明史』全二八冊（中華書局、北京、一九七四年）。
- 『萬曆邸鈔』：『萬曆邸鈔』（国立中央図書館（台北）出版、正中書局印行、一九六九年）。
- 「萬曆四十年朝鮮國王致禮部請罷中江關市以清疆界以防奸弊事咨文」：中国国家博物館編『中国国家博物館館藏文物研究叢書 明代檔案卷』（上海古籍出版社、二〇〇六年）、八四〜八五頁。
- 『遼東志』：『尊經閣叢書 遼東志』（高木亥三郎発行、一九一二年）。
- 『遼滿洲檔』：馮明珠主編『滿文原檔』全一〇冊（国立故宮博物院（台北）、二〇〇五年）および神田信夫、松村潤、岡田英弘譯註『遼滿洲檔 天聰九年』二冊（東洋文庫、一九七二〜一九七五年）
- 『朝鮮國來書簿』京都大学人文科学研究所所蔵本（請求記号 内藤―一二七）

『滿文老檔』：滿文老檔研究会訳註『東洋文庫叢刊一二 滿文老檔』四〇七（東洋文庫、一九五九～一九六三年）。

『内國史院檔』：東洋文庫清代史研究委員会編『内國史院檔 天聰七年』（東洋文庫、二〇〇三年）および清朝滿洲語檔案史料の総合的研究チーム編『内國史院檔 天聰八年』（東洋文庫、二〇〇九年）。

『欽定八旗通志』：『中国史学叢書続編二 欽定八旗通志』全三〇冊（台湾学生書局、一九六八年）。

「朝鮮國王答金國汗書」中央研究院歴史語言研究所内閣大庫所蔵、登録番号〇三八一三六）。

「清太宗詔諭」：「図版二 清太宗詔諭 朝鮮総督府図書館蔵」『青丘学叢』一、一九三〇年八月。

『清太宗實録』（順治初纂）：『大清太宗文皇帝實録』国立故宫博物院図書館蔵（台北）所蔵（統一編号「故宫〇一六六九」）。

『大清全書』：早田輝洋・寺村政男『大清全書 増補改訂・附滿洲語漢語索引』本文篇（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、二〇〇四年）。

『本草綱目』：国立公文書館内閣文庫所蔵本（請求記号 別四二・八）

『五雜組』：東京大学総合図書館所蔵本（請求記号 A九〇―四八四）

『國権』：『國権』全六冊（古籍出版社出版、中華書局上海印刷廠印刷、新華書店發行、一九五八年）

『天工開物』『中国古代版画叢刊 天工開物』全三冊（中華書局（北京）出版、一九五九年）

その他史料

『朝鮮通交大紀』：田中健夫・田代和生校訂『朝鮮通交大紀』（名著出版、一九七八年）

Richard Cocks 発イギリス東インド会社本店宛書簡（一六一四年五月）『大日本史料』一二編一七、東京帝国大学文科大學史料編纂掛、一九一四年、四六四～四六八頁所載。

Elbert Woutersen 発オランダ東インド会社平戸商館宛書簡（一六一四年九月）『大日本史料』一二編一七、東京帝国大学文科大学史料編纂掛、一九一四年、四九九頁所載。

研究書

日本語

単行本（著者名五十音順）

石濱裕美子『清朝とチベット仏教―菩薩王となった乾隆帝』（早稲田大学出版部、二〇一一年）。

稲葉岩吉『満洲発達史』（大阪屋号出版部、一九一五年）。

稲葉岩吉『光海君時代の満鮮関係』（大阪屋号書店、一九三三年）。

今村鞆『人蔘史』全七卷（朝鮮総督府専売局、一九三四〜一九四〇年）。

江嶋壽雄『明代清初の女直史研究』（中国書店、一九九九年）

岡本隆司『近代中国と海関』（名古屋大学出版会、一九九一年）。

川勝平太・濱下武志編『アジア交易圏と工業化―一五〇〇―一九〇〇』（リブレポート、一九九一年）。

沢村東平『朝鮮綿作綿業の生成と発展』（朝鮮綿花協会、一九四一年）。

篠田治策『白頭山定界碑』（楽浪書院、一九三八年）。

末松保和『末松保和朝鮮史著作集五 高麗朝史と朝鮮朝史』（吉川弘文館、一九九六年）。

田川孝三『毛文龍と朝鮮との関係について』（『青丘説叢』三、今西龍発行、近澤印刷部（京城）印刷並発売、彙文堂書店（京都）発売、一九三二年）。

田川孝三『李朝貢納制の研究』（東洋文庫、一九六四年）。

田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』（創文社、一九八一年）。

田代和生『日朝交易と対馬藩』（創文社、二〇〇七年）。

檀上寛『明代海禁Ⅱ朝貢システムと華夷秩序』（京都大学学術出版会、二〇一三年）。

松浦章『近世中国朝鮮交渉史の研究』（思文閣出版、二〇一三年）。

三田村泰助『清朝前史の研究』（同朋舎、一九六五年）。

和田正広『中国官僚制の腐敗構造に関する事例研究―明清交代期の李成梁をめぐる―』（九州国際大学社会文化研究所、一九九五年）。

論文（著者名五十音順）

鮎貝房之進「市廛攷（三）」『朝鮮』三三四、一九四三年三月。

新宮学「明代の牙行について―商税との関係を中心に―」『山根教授退休記念明代史論叢』上（汲古書院、一九九〇年）。

岩井茂樹「一六世紀中国における交易秩序の模索」『中国近世社会の秩序形成』（京都大学人文科学研究所、二〇〇四年）。

岩井茂樹「帝国と互市―一六―一八世紀東アジアの通交」籠谷直人・脇村孝平編『帝国とアジア・ネットワーク』（世界思想社、二〇〇九年）。

浦廉一「明末清初の鮮満関係上に於ける日本の地位（一）・（二）」『史林』一九―二、一九一三、一九三四年四月、七月。

浦廉一「明末清初に於ける満・鮮・日関係の一考察」羽田博士還暦記念会編『羽田博士頌寿記念東洋史論叢』（東洋史研究会、一九五〇年）。

浦廉一「近世における中・鮮・日間の経済交流」『広島大学文学部紀要』九、一九五六年三月。

- 江嶋壽雄 「天聰年間における朝鮮の歳幣について」『史淵』一〇一、一九六九年一月。
- 江嶋壽雄 「崇徳年間における朝鮮の歳幣について」『史淵』一〇八、一九七二年八月。
- 鴛淵一 「清初満洲の天産物に就いて——順治年間档」に見ゆるもの『ヒストリア』一二、一九五五年五月。
- 鴛淵一 「清鮮関係の一齣——竹瀝考」『東方學』二七、一九六四年二月。
- 鴛淵一 「朝鮮国来書簿の研究（一）」『遊牧社会史探求』三三、一九六八年三月。
- 四方博 「併合以前朝鮮貿易の概観」朝鮮貿易協会編『朝鮮貿易史』（朝鮮貿易協会、一九四三年）。
- 徐仁範（渡昌弘訳）「朝鮮使節の海路朝貢路と海神信仰——『燕行録』の分析を通して」吉尾寛編『東アジア海域叢書四 海域世界の環境と文化』（汲古書院、二〇一一年）。
- 申奭鎬 「朝鮮中宗代の禁銀問題」『稲葉博士還暦記念満鮮史論叢』（稲葉博士還暦記念会、一九三八年）。
- 末松保和 「麗末鮮初における対明関係」『史学論叢 第二』（京城帝国大学文学会論纂一〇）、岩波書店、一九四一年。
- 鈴木開 「一六二〇年の朝鮮燕行使李廷龜一行の交渉活動——光海君時代における対明外交の一面」『東洋学報』九一（二）、二〇〇九年九月。
- 鈴木開 「光海君十三年（一六二二）における鄭忠信の後金派遣——光海君時代の朝鮮と後金の関係について」『朝鮮史研究会論文集』五〇、二〇一二年一〇月。
- 鈴木開 「辻大和報告へのコメント」『朝鮮史研究会会報』一九一、二〇一三年三月。
- 田川孝三 「藩館考」小田先生頌寿記念会編『小田先生頌寿記念朝鮮論集』（大阪屋号書店、一九三四年）。
- 田川孝三 「朝鮮淡婆姑小考」『朝鮮行政』一一二、一九三七年二月。
- 田中健夫 『中世対外関係史』（東京大学出版会、一九七五年）。
- 檀上寛 「明代海禁概念の成立とその背景——違禁下海から下海通番へ」『東洋史研究』六三（三）、二〇〇四年一二月、

四二一頁。

鶴見立吉「会寧開市に就て」『朝鮮史学』四、一九二六年四月、同「会寧開市に就て（再ひ）」『朝鮮史学』五、一九二六年五月。

寺内威太郎「李氏朝鮮と清朝との辺市について（一）」『駿台史学』五八、一九八三年三月。

寺内威太郎「李氏朝鮮と清朝との辺市について（二）」『会寧・慶源開市を中心として』『駿台史学』五九、一九八三年九月。

寺内威太郎「慶源開市と琿春」『東方學』七〇、一九八五年七月。

寺内威太郎「義洲中江開市について」『駿台史学』六六、一九八六年二月。

寺内威太郎「初期の会寧開市―朝鮮の対応を中心に」『駿台史学』一〇八、一九九九年一二月。

寺内威太郎「近世における朝鮮北部地域と中国東北地方との政治経済関係に関する研究」『明治大学人文科学研究所紀要』四八、二〇〇一年三月。

中村栄孝「満鮮関係の新史料―清太宗朝鮮征伐に関する古文書」『青丘学叢』第一号、一九三〇年八月。

中村栄孝「江戸時代の日鮮関係」『日鮮関係史の研究』下（吉川弘文館、一九六九年）。

中村栄孝「己酉約条再考」『朝鮮学報』一〇一、一九八一年一〇月。

畑地正憲「清朝と李氏朝鮮との朝貢貿易について―特に鄭商の盛衰をめぐって」『東洋学報』六二（三・四）、一九八一年三月。

平野隆「朝鮮貿易と対馬藩」『歴史学研究』六一六、一九三六年六月。

夫馬進「一六〇九年、日本の琉球併合以降における中国・朝鮮の対琉球外交」『朝鮮史研究会論文集』四六、二〇〇八年一〇月。

松浦章「明朝末期の朝鮮使節の見た北京」岩見宏・谷口規久雄編『明末清初期の研究』（京都大学人文科学研究所、一九八九年）。

松浦章「袁崇煥と朝鮮使節」『史泉』六九、一九八九年三月。

関德基『前近代東アジアのなかの韓日関係』（早稲田大学出版会、一九九四年）。

森克己「中世末・近世初頭における対馬宗氏の朝鮮貿易」『九州文化史研究所紀要』一、一九五一年三月。

森岡康「丁卯の乱後に於ける贖還問題」『朝鮮学報』三二、一九六四年七月。

森岡康「第二次清軍入寇後の朝鮮人捕虜の売買」『朝鮮学報』一〇九、一九八三年一〇月。

森岡康「第二次清軍入寇後の朝鮮潜商の一管見」榎博士頌寿記念東洋史論叢編纂委員会編『榎博士頌寿記念東洋史論叢』（汲古書院、一九八八年）。

山口正之「昭顯世子と湯若望」『青丘学叢』五、一九三一年八月。

米谷均「一七世紀日朝関係における武器輸出について」『史学雑誌』一〇八―一二、一九九九年一二月。

李啓煌『文祿慶長の役と東アジア』（臨川書店、一九九七年）。

渡辺美季「琉球侵攻と日明関係」『東洋史研究』六八―三、二〇〇九年一二月。

田中健夫「鎖国成立期における朝鮮との関係」同『中世対外関係史』（東京大学出版会、一九七五年）。

朝鮮語

単行本（著者名カナダ順）

姜萬吉『朝鮮後期商業資本의 發達』（高麗大学校出版部、一九七〇年）。

権乃鉉『朝鮮後期平安道財政研究』（知識産業社、二〇〇四年）。

桂勝範『朝鮮時代海外派兵과 韓中關係』(푸른역사, 二〇一〇年)。

金致雨『攷事撮要의 書誌的研究 — 特히冊版目錄을 中心으로』(成均館大學校大學院圖書館學科碩士學位論文, 一九七二年)。

孫兌鉉『增訂 韓國海運史』(暁星出版社, 一九九七年)。

李迎春『朝鮮後期王位繼承研究』(集文堂, 一九九八年)。

李哲成『朝鮮後期對清貿易史研究』(國學資料院, 二〇〇〇年)。

鄭成一『朝鮮後期對日貿易』(新書苑, 二〇〇〇年)。

정은주『조선시대 사행기록화 — 옛 그림으로 읽는 한중관계사』(사회평론, 二〇一二年)。

韓明基『임진왜란과 한중관계』(歷史批評社, 一九九九年)。

韓明基『정묘·병자호란과 동아시아』(푸른역사, 二〇〇九年)。

論文(著者名カナダ順)

丘凡眞「清의 朝鮮使行人選과, 淸帝國體制」『인문논총』五九、二〇〇八年六月。

金聖七「燕行小攷 — 朝中交涉史의 一齣」『歷史學報』一一、一九六〇年。

金鐘円「朝鮮後期 對淸貿易에 대한 一考察」『中國問題研究』五、一九八〇年九月。

金鐘円「初期 淸貿易 交涉考(天命朝)」『釜山大學校人文科學論文集』二〇、一九八〇年一二月。

金鐘円「初期 淸貿易 交涉考(天聰朝)」『釜山大學校人文論叢』二二、一九八二年一二月。

金鐘円『근세 동아시아 관계사 연구 .. 淸交涉과 東亞三國交易을 중심으로』(혜안, 一九九九年)。

朴興秀「李朝尺度에 關한 研究」『大東文化研究』四、一九六七年七月。

- 吳星 「朝鮮後期蔘商에 대한考察—私商의 台頭와 關聯하여」 『韓國學報』 五—四、一九七九年。
- 宋美玲 「入關前 清朝의 瀋陽館統制樣相」 『明清史研究』 三〇、二〇〇八年一〇月。
- 안유림 「명칭교체기 瀋陽館의 역할」 『韓國文化』 五〇、二〇一〇年六月。
- 柳承宙 「一七世紀 私貿易에 관한 一考察 — 朝·清·日間の 焰硝·硫黃貿易을 中心으로」 『弘大論叢』 Ⅹ、一九七九年二月。
- 유승주·이철성 『조선후기 중국과의 무역사』 (景仁文化社、二〇〇二年)。
- 李龍範 「成鈺의 蒙古牛買入과 枝三·南草」 『震檀學報』 二八、一九六五年一二月。
- 李鉉淙 「明使接待考」 『郷土서울』 一二、一九六一年。
- 李鉉宗 「己酉約條成立仕末과 歲遣船數에 대하여」 『港都釜山』 四、一九六四年一〇月。
- 李賢淑 「一六—一七世紀朝鮮의 对中国輸出政策에 關한 研究」 『弘益史學』 六、一九九六年二月。
- 李賢淑 「倭乱胡乱時期朝鮮의 对中国輸入政策에 對한 研究」 『白山學報』 六八、二〇〇四年四月。
- 全海宗 「倭乱·胡乱 時의 劉海와 劉興祚」 『曉城趙明基博士華甲記念史學論叢』 (同書刊行委員會、一九六五年)。
- 全海宗 「韓中朝貢 關係考 — 韓中關係史의 鳥瞰을 위한 導論」 『東洋史學研究』 一、一九六六年一〇月。
- 全海宗 「丁卯胡乱的 和平交渉에 대하여」 『叵細叵學報』 三、一九六七年五月。
- 全海宗 「清代韓中關係의 一考察 — 朝貢制度를 통하여 본 淸의 態度的 變遷에 대하여」 『東洋學』 一、一九七一年一〇月。
- 鄭恩主 「明清交替期 對明 海路使行記錄画研究」 『明清史研究』 二七、二〇〇七年四月。
- 曹圭益ほか編 『연행록연구총서 (六역사)』 (學古房、二〇〇六年)。
- 趙麒永 「雪汀 李屹의 『朝天日記』 연구」 『東洋古典研究』 七、一九九六年一二月。

趙璣濬「人蔘貿易와 蔘政考」『社會科學論集 高麗大學校政經大學』四、一九七五年。
車文燮「宣祖朝의 訓練都監」『史學志』四、一九七〇年。
許泰玖「一七세기 朝鮮의 焰硝貿易과 火藥製造法 발달」『韓國史論』四七、二〇〇二年六月。
洪性德「一七世紀初 对日政策의 確立過程과 그 性格」『全北史學』一九・二〇、一九九七年五月。

中国語

単行本（著者名ピンイン順）

李花子『清朝与朝鮮關係史研究』（延慶大學出版社、二〇〇六年）。
劉家駒『清朝初期的中韓關係』（文史哲出版社、一九八六年）。
吳一煥『海路・移民・遺民社會——以明清之際中朝交往為中心』（天津古籍出版社、二〇〇七年）。
張存武『清韓宗藩貿易——一六三七—一八九四』（中央研究院近代史研究所（台北）、一九七八年）。

論文（著者名ピンイン順）

林楓「万曆礦監稅使原因再探」『中國社會經濟史研究』八〇、二〇〇二年三月。
林基中「一七世紀的水路『燕行錄』与登州」『登州港与中韓交流國際學術討論會論文集』（山東大學出版社、二〇〇五年）。
劉家駒「崇德改元与太宗伐朝鮮之役」『沈剛伯先生八秩榮慶論文集』（聯經出版事業公司、一九七六年）。
劉家駒「天聰元年阿敏等伐朝鮮之役与金國朝鮮兄弟之盟」『食貨 月刊』復刊第七卷第一〇期、一九七八年一月。
劉家駒「金國、朝鮮之建交与開市」『食貨 月刊』復刊第九卷第一、二期、一九七九年五月。

劉家駒 「清初朝鮮助兵攻陷皮島始末」『食貨 月刊』復刊第一一卷第五期、一九八一年七月。
劉家駒 「清初与朝鮮締結媾婚及朝鮮進獻侍女考」『食貨 月刊』復刊第一二卷第三期、一九八二年六月。
劉家駒 「清初徵兵朝鮮始末（上）」『食貨 月刊』復刊第一二卷第九期、一九八三年二月。
劉家駒 「清初徵兵朝鮮始末（下）」『食貨 月刊』復刊第一二卷第一二期、一九八三年三月。
劉家駒 「清初朝鮮世子等入質瀋陽始末」『中韓關係史國際檢討會論文集 九六〇～一九四九』（中華民國韓國研究学会、一九八三年）。
莊吉發 「滿鮮通市考」『食貨月刊』復刊五·六、一九七五年九月。
鄒振環 「明末清初朝鮮的赴京使团与漢文西書的東伝」『韓國研究論叢』四、一九九八年二月。

英語

John K. Fairbank ed. *The Chinese World Order: Traditional China's Foreign Relations*, Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1968.
Ray Huang, *Taxation and Governmental Finance in Sixteenth-Century Ming China*, Cambridge: Cambridge University Press, 1974.
James B. Lewis, *Frontier Contact between Chosŏn Korea and Tokugawa Japan*, London: RoutledgeCurzon, 2003.

論文の内容の要旨

論文題目 17世紀前半における朝鮮の対明清貿易政策

氏名 辻 大和

本論文では17世紀前半における朝鮮の対明清貿易政策の展開について論じた。17世紀前半の時期は明から清へ中国の統一王朝が交替する時期にあたり、朝鮮の19世紀末までの国際環境の基礎が形成される時期であることから注目されるものの、朝鮮の対明清関係史の研究のなかで、貿易に関する分野は未だ課題が多い。例えば貿易によって銀や、薬材といった貴重な物資を朝鮮は入手することができたが、その輸入のために使節団の貿易や国境地帯での貿易を朝鮮がどのように管理していたのかということは明らかでない。

そこで本論文では、朝鮮、明、後金（清）という複数の国家の年代記史料（『朝鮮王朝實錄』や『明實錄』、『清實錄』など）、外交文書を用いて17世紀前半における朝鮮の対明清貿易政策の展開について論じた。

第1章では、壬辰・丁酉の乱後における朝鮮の対明貿易政策を探るべく、朝鮮が中江開市と燕行使貿易に対してとった態度の違いについて、その詳細と背景を考察した。

壬辰・丁酉の乱後、朝鮮の対明貿易は朝明国境における中江開市と明の勅使、朝鮮の燕行使の三手段で行われた。朝鮮は中江開市に関して、三度も明に廃止要請を出すなど消極的な姿勢を示した。一方で朝鮮は燕行使の往来に合わせて火薬原料を輸入し始め、銀の輸出を行った。朝鮮は燕行使貿易には積極的であった。

こうした中江開市への消極姿勢と、燕行使貿易への積極姿勢の違いの背景には、朝鮮が従来朝貢で経済的な利益を受けていたことがあった。燕行使の貨物は明から免税とされていたのに対し、開市貿易は明から課税された。また、開市貿易では取引形態が朝鮮商人に不利なものであり、朝鮮の機密情報が流出するという問題もあった。結局、光海君5（1613）年には朝鮮は明との互市貿易（中江開市）を廃止することに成功し、朝貢貿易で

ある燕行使貿易を継続させた。16世紀以降に中国周辺で活発化した互市貿易に対して朝鮮は利点をさほど見いださなかった。

第2章では、壬辰・丁酉の乱後の朝鮮による対日通交の再開過程と、明による朝鮮の対外貿易への関わりを考察した。

光海君元（1609）年には朝鮮は対馬と己酉約条を結び、東萊での日朝貿易が正式に再開した。その貿易には封進回賜、公貿易、倭館における開市、密貿易の四種類があった。日朝通交が再開した後、朝鮮は日朝通交の現場である倭館においては倭人を倭館に滞留させない開市日程作りや、明の禁制品を含む貿易品の取り締まりをおこなった。明は官を東萊に派遣して日朝通交の実態調査を行っていた。

光海君元（1609）年に明の朝貢国であった琉球が日本の薩摩に征服されてからは、明は日本に対して警戒姿勢を強め、朝鮮での倭館貿易も問題視された。明皇帝は朝鮮に対して歳遣船の制限、倭館における倭人滞留の取締りを直接に要求した。朝鮮は明から一定の範囲内ではあるが対日貿易の承認を取り付けたといえる。

このように壬辰・丁酉の乱後、日本から朝鮮を経て明へ向かう貿易経路が再開されたわけであったが、明が朝明貿易においては商取引の活発化を企図した介入（中江開市への誘導）を図ったのに対し、朝日貿易に対しては商取引の活発化を図らず、むしろ取引の抑制を求めていることがわかる。

第3章では、第1章と第2章で見たような17世紀初における朝鮮による貿易の取り組みのなかで、輸出物資が実際にどのように取り扱われたか、人蔘を例に論じた。人蔘の流通過程、および流通に対する朝鮮の施策の背景と意義について論じた。

この時期、朝鮮は明に対する使節派遣のたびに人蔘献上を行なっていたが、朝貢用の人蔘の調達に厳しかった。戸曹は邑に対して人蔘納入を賦課していたものの、邑が実際には納入できなかったためである。

このような人蔘の調達難は、宣祖26（1593）年にはじまった中江開市經由の明向け人蔘輸出の盛行と関連があった。政府の官庁が人蔘取引を行なうことも実際に見られ、密貿易も盛んに行われていた。

それゆえ戸曹は宣祖37（1604）年に、人蔘商人に対し、戸曹と開城府が発行する通行許可証の所持を義務付け、人蔘取引を統制下に置くことにし

た。朝貢用の人蔘の確保と、明向けの人蔘私貿易の継続を図るための施策であったといえる。朝鮮による人蔘取引の規制は、16世紀末の明との人蔘貿易拡大に対処する中で、明への朝貢品確保という外交上の要請から形成されたのであった。

第4章では光海君13(1621)年から仁祖15(1637)年にかけて朝鮮が明への朝貢に際して海路を利用した際に、発生した使行の内容変化について、特に貿易の変化や同時期に発生した問題を考察した。

朝鮮使節の明への使行経路は光海君14(1622)年から仁祖5(1627)年ごろまでは宣沙浦から登州という経路であった。その後仁祖6年には石多山から登州に変わり、仁祖7年には明によって石多山から寧遠に至る経路に変更を強いられた。海路になったことで朝鮮政府は、使節の一行が朝鮮と登州を往来する際や、登州に留まる際に、船を糧米の購入・運送に行うことを企図し、実際に実行された。

一方で問題も生じた。それは第一に、出港地までの沿路邑の負担が増大したことである。第二に、使節団のなかで密輸が行われたことである。第三に、仁祖6(1628)年の後金と朝鮮との貿易開始により、海路使行貿易が明から後金への援助行為とみられる恐れが生じたことである。さらに毛文龍は朝鮮使節の船や貨物を略奪して朝鮮の中継貿易を牽制した。

これに対し、朝鮮政府は使節団の出帰帆地に中央から御史を派遣し、使節団の荷物を検査することで対処した。また明政府は使節団の貨物検査を行った。

朝鮮の海路を通じた対明使行をみると、朝鮮が決して海路の利用に否定的であったわけではなく、変化に順応しようとする動きもあったといえる。ただ海路利用を制限する要因には、官僚による海への恐れといった要因だけでなく、朝鮮の沿路邑の負担という財政的要因や、明による後金との貿易への警戒、明将による略奪といった外交的要因も存在した。

第5章では仁祖6(1628)年からの朝鮮の対後金貿易政策について論じた。

仁祖5(1627)年の盟約締結後、後金は朝鮮に貢献を要求し、結局朝鮮は貢献を送った。続けて後金は朝鮮に開市を要求し、義州と会寧で開市が行われるようになった。しかし開市には朝鮮の商人と商品は集まりにくく、後金使節は漢城や平壤など朝鮮内地に入った際に取引を行うようになった。

朝鮮は後金との商取引に消極的であったが、自国使節が後金に入る場合には商人を帯同させていた。

貢献については、朝鮮は後金の要請に応える場合と応えない場合があった。開市場での取引においては、朝鮮政府は朝鮮商人が価格面で不利に置かれた場合は商人を保護するために外交交渉を行った。一方で朝鮮商人の中に後金使節に対して不正を働いた者が発覚した際には朝鮮政府は取締を厳格に行わず、朝鮮の政府機関が越境採蔘を促進することさえあった。朝鮮は後金との貿易において弊害が多くても貿易を中止したことはなかった。

朝鮮が、消極的ながら後金貿易を継続した姿勢の背景としては当時の国際情勢があったと考えられる。朝鮮は明、後金、日本との間に貿易の窓口を持っていた。当時の東アジアでは最多の窓口数である。朝鮮からみれば後金は明産品、東南アジア産品、工芸品を輸出する格好の相手であり、明や日本への重要な輸出品である人蔘を輸入できる存在であった。

第6章では、朝鮮の対清貿易政策が仁祖15(1637)年から仁祖22(1644)年にかけてどのように行われたのかを探った。

丙子の乱(仁祖15年)で清に降伏した朝鮮は明と断交した。朝鮮は使節団を清に定期的を送るよう義務づけられ、朝鮮は清への人質として世子らを瀋陽に送ることとなった。さらに朝貢に際しては朝鮮から方物が献上され、年に一回歳幣も納めさせられることとなった。ほかに会寧での開市が仁祖16年に始められ、規則が整備されていった。

朝清間には朝貢と会寧開市以外の貿易も存在した。朝鮮の世子が滞在した瀋陽館は朝鮮から清への物資輸出の窓口となるが多かった。ほかに瀋陽において朝鮮による被虜人の贖還が行われたが、朝鮮使節一行のなかで贖還を偽装した貿易が行われると、国王自ら貿易の取り締まりを命じることとなった。

朝鮮は、朝鮮と清の間で、瀋陽館に所属した官吏、平安道所属の軍官、漢城から派遣される使節団や訳官の三者を往来させた。ただ物膳輸送の駄数厳守といった施策が行われたことを考えると、朝鮮は朝清貿易の拡大をそれほど望んでいなかったものと推測される。

朝鮮の官吏や国境地帯住民による密貿易は存在した。朝鮮政府は官吏によるタバコ、青布などの清への携行を禁止し、明と密輸を行っている疑念

を清にもたれないように図っていた。

仁祖 15 (1637) 年から仁祖 22 (1644) 年の間は、朝鮮は清との間では通常の朝貢と開市 (会寧) に加え、瀋陽館を通じた貿易を行うなど、貿易の手段が結果として多様化したことが大きな特徴といえる。瀋陽館に朝鮮の官員が王世子の世話のために常駐していたこと、平安道から物資の送付のためにほぼ定期的に官吏が瀋陽との間を往来していたことから、瀋陽館を通じた貿易が可能になったのは間違いない。

以上のように本論では、1590 年代から 1640 年代にかけての、朝鮮による対明清貿易管理政策の展開について考察した。朝鮮は朝貢による貿易を最も選好し、明との貿易においては中江開市があっても廃止に追い込んだ。明との連絡路が海路になると、朝貢団の規模を拡大させていた。一方、朝鮮は後金 (清) とは仁祖 6 (1628) 年から貿易を開始させたが、それは開市を初期から含むものであった。丙子の乱で清に朝鮮が服属した仁祖 15 (1637) 年以降は明との貿易が絶たれ、清との貿易に一本化された。ここでは朝貢と開市のほかに、清の人質となった王世子が起居した瀋陽館を窓口とする貿易が行われた。明との貿易時期に比べると朝鮮の対中貿易の経路は三経路以上に増加した。